

大村廣陽 生きものへのまなざし

心フルス
ふくやま美術館

2015年 2月3日(火) - 4月5日(日) 会場：常設展示室

※月曜休館



15. 《古都神鹿》



17. 鹿スケッチ (部分)



18. 群鹿図



19. 古都神鹿 画稿



21.22. 古都神鹿 鹿頭部習作

大村廣陽（本名・種五郎、1891（明治24）-1983（昭和58）年）は、広島県沼隈郡東村（現・福山市東村町）に生まれ、京都で活動した日本画家である。幼い頃から絵を描くことが得意だった廣陽は、京都市立美術工芸学校（以下‘美工’）と京都市立絵画専門学校（以下‘絵専’、現・京都市立芸術大学）を経て、竹内栖鳳主宰の画塾・竹杖会に入る。在学中に文展で初入選して以来、文展・帝展を中心に精力的に出品を重ね、京都画壇の中堅として活躍を見せた。

その作品は、徹底した写生に基づいた色彩鮮やかな画面が特徴で、廣陽が最も得意とした動物画、花鳥画をはじめ、晩年の仏画に至るまで数多くの力作を残している。

本展は、廣陽の動物画と花鳥画を中心に、本画はもとより下絵、スケッチ、学生時代の写生帳等もあわせて展観することにより、画家のモチーフとなる動植物への愛情や真摯な作画姿勢、そして作品世界の魅力を紹介するものである。



8.《休み（習作）》



9.《狗子と鶏頭》



11.《赤インコに青鳥》



12.《朝顔図》



10.《威振》



13.《芥子図》



23.《南国の水辺》

京都での学生生活

のちに日本画家・大村廣陽となる種五郎少年は、故郷・福山にて高等小学校を卒業すると、1907（明治40）年、美工に入学、京都東山にある知恩院境内の寺に下宿をして通学することとなる。当時の美工は教授に竹内栖鳳、菊池芳文、山元春挙、助教授に西山翠嶂などを擁し、修業年限3年間のうちで運筆、臨模、写生、彩色を中心に、伝統的技法に基づいた作画を学ぶこととなっていた。

在学中の1908（明治41）年に記した「夏休暇日記」では、絵画科2年大村不迷として学校へ帰郷報告をしているが、その内容からは日々身近な動植物の写生に励み、描写力の鍛錬を怠らない生真面目な画学生の姿が窺える。当時の写生を見ても、鳥や魚、草花などを徹底的に観察し、その生態を細密に描き込んでおり、この学生期の鍛錬が「動物・花鳥画家 大村廣陽」としての礎を築いたのだといえる。ちなみに、「廣陽」の画号は2年次の修業制作時より用い始めている。

1909（明治42）年、絵専が創立され、第1期生として土田麦僊、小野竹喬らが竹内栖鳳門下から入学している。彼らはすでに当時の京都画壇において若きホープとして活躍しており、これら偉大な先輩の作風は、後に廣陽が画道に精進していくうえで大きな影響を与えるのであった。

3年次に制作した《五月雨図》《葡萄図》がそれぞれ校内銀牌と校内褒状1等を受け、卒業制作《水牛》は学校買い上げとなるなど、廣陽は優秀な成績で美工を卒業し、1911（明治44）年4月、絵専に引き続き入学した。この年の夏休暇、廣陽は満州で弁護士として勤務していた叔父の誘いもあって独りで中国へ渡り、旅順・大連・奉天を巡っている。旅行中の写生帳を見ると、日本とは異なる珍しい景観・風俗に大いに刺激を受けたのか、現地の建物や人々、荷を引くロバなど目に留まった様々な対象を所狭しと描きとめている。そして帰京して制作したのが6曲1隻の《休み》（本展に展示しているのはその習作）（no.8）であった。これは中国の民家を背景に荷車を引く3頭のロバを描いた作品であるが、目を細めた表情をした愛くるしいロバの姿からは、廣陽の動物への温かいまなざしが感じられる。11月の第5回文展に出品したこの大作は、見事初入選し、褒状を受けている。そのうえ宮内庁東宮職の買い上げとなり、京都画壇に華々しいデビューを果たしたのであった。

最終学年となった1914（大正3）年3月、卒業制作《牛》を発表。主席卒業となった廣陽には学校に助手として残り後進の指導にあたるという道もあったものの、卒業後は学校の恩師である竹内栖鳳の画塾竹杖会に入り、栖鳳の内弟子として自らの画技を更に研鑽していく道を選んだ。

竹杖会と先輩画家たち

竹杖会は、西山翠嶂、西村五雲、土田麦僊、小野竹喬ら先輩が作品を審査し、師栖鳳が講評する栖鳳一門の勉強会であった。この頃にも、廣陽は動物画制作を主軸として、意欲的な作品を次々発表していく。

こうよう
大村廣陽 略年譜

※《太字》の作品は、本展に出品

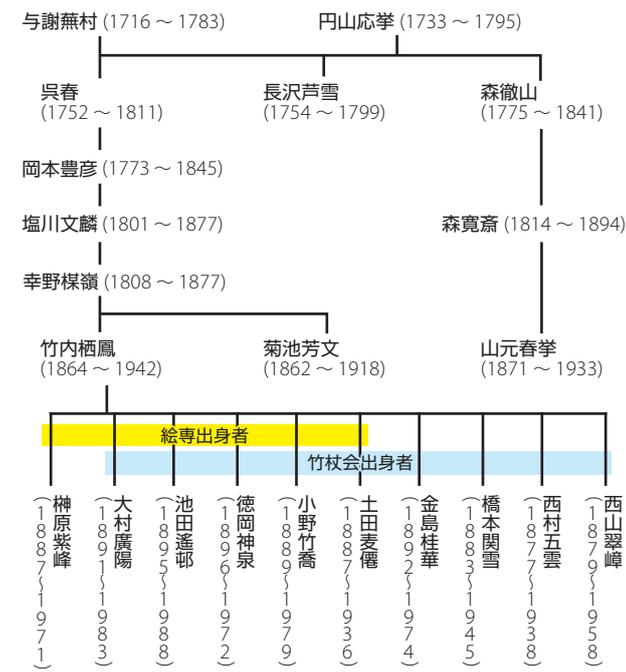
1891年(明治24年)		10月10日、広島県沼隈郡東村(現・福山市東村町)に父大村重吉、母ユキの二男・種五郎として生まれる。
1902年(明治35年)	11歳	東村尋常小学校を卒業。
1906年(明治39年)	15歳	松永高等小学校を卒業。
1907年(明治40年)	16歳	京都市立美術工芸学校絵画科へ入学。知恩院内崇泰院に下宿。
1908年(明治41年)	17歳	《芙蓉図臨模》で校内褒状1等、《魚写生》で校内銀牌を獲得。画号を廣陽とする。
1910年(明治43年)	19歳	《五月雨図》で校内銀牌、《葡萄図》校内褒状1等を獲得。
1911年(明治44年)	20歳	《猿猴》で校内銀牌獲得、京都市立美術工芸学校を卒業。卒業制作《水牛》は学校買上。京都市立絵画専門学校本科に入学。中国・大連などを旅行。第16回新古美術品展に《水牛》を出品(4等褒状)。第5回文展に《 休み 》を出品(初入選、褒状、東宮職買上)。
1912年(明治45・大正元年)	21歳	第17回新古美術品展に《長閑》を出品(4等褒状)。第6回文展に《水牛》を出品(褒状)。
1913年(大正2年)	22歳	第18回新古美術品展に《猿猴》を出品(4等褒状)。
1914年(大正3年)	23歳	東京大正博覧会に《犢》を出品。京都市立絵画専門学校本科を卒業。卒業制作《牛》は学校買上。竹内栖鳳画塾竹杖会に入る。第8回文展に《せんたくもの》を出品。
1915年(大正4年)	24歳	第9回文展に《初夏》を出品(褒状)。大典記念京都博覧会に出品。
1917年(大正6年)	26歳	第11回文展に《はげの木》を出品。
1918年(大正7年)	27歳	第12回文展に《蕃薯寮郊外》を出品。
1919年(大正8年)	28歳	第1回帝展に《永き日と夕映》を出品。
1920年(大正9年)	29歳	東インド(インドネシア)方面を旅行。
1921年(大正10年)	30歳	大阪で個展(白木屋百貨店美術部)を開催。第3回帝展に《青鸞》を出品。藤井サクヨと結婚し、新居を花園村(現・京都市右京区花園)に移す。
1922年(大正11年)	31歳	日本美術展(パリ)に《青鸞》を出品。第4回帝展出品予定作《羚羊と羊》を制作。長女薫子誕生。
1923年(大正12年)	32歳	帝国絵画院第1回展に《寒木に山鳩》を出品。日本美術展(京都・東京)に《神鹿》を出品(《 古都神鹿 》と同一作品)。谷口町梅津間に転居。
1924年(大正13年)	33歳	第5回帝展に《養禽園の春》を出品。大阪で個展を開催。
1925年(大正14年)	34歳	第6回帝展に《牝鶏》を出品。
1926年(大正15・昭和元年)	35歳	第7回帝展に《藤の花かげ》を出品。長男廣光誕生。
1927年(昭和2年)	36歳	第8回帝展に《 軍鶏 》を出品。東亜産業博覧会に招待出品。
1928年(昭和3年)	37歳	第9回帝展に《南苑》を出品。大礼記念京都博覧会に《瑞雪》を招待出品。久邇宮家の天井絵を制作。
1929年(昭和4年)	38歳	小野竹喬、金島桂華らとともに帝展無鑑査に推薦される。パリ日本美術展に《雪》を出品(買上)。第10回帝展に《雪》を無鑑査出品。中日現代絵画展に《立葵》《虞美人草》《椿》を出品(買上)。台湾、中国、東インドを旅行。
1930年(昭和5年)	39歳	第2回聖徳太子奉賛会展に《深み行く秋》を無鑑査出品。第11回帝展に《八重椿》を無鑑査出品。イタリア日本美術展に《春光》を出品。
1931年(昭和6年)	40歳	ベルリン日本画展に《雪中鴛鴦》を出品。第12回帝展に《鶉》を無鑑査出品。トレド日本画展に《鴛鴦》《金魚》を出品。シャム国日本美術展(タイ)に《静かなる池》《白牡丹》を出品。
1932年(昭和7年)	41歳	第13回帝展に《朝光をうけて》を無鑑査出品。
1933年(昭和8年)	42歳	第14回帝展に《春のうす雪》を無鑑査出品。福山で個展(福山城公園内葦陽館)を開催。
1934年(昭和9年)	43歳	大礼記念京都美術館美術展に《晴れ行時雨》を出品。第15回帝展に《仙峡爽秋》を無鑑査出品。
1935年(昭和10年)	44歳	東京府美術館10周年記念現代総合美術展に《南苑》を出品。
1936年(昭和11年)	45歳	大阪で個展(阪急百貨店美術部)を開催。新文展招待展に《 南国の水辺 》を招待出品。
1937年(昭和12年)	46歳	第1回新文展に《豹》を無鑑査出品。
1938年(昭和13年)	47歳	第2回絵画工芸新作展に《鶉籠》を出品。大阪で個展(阪急百貨店美術部)を開催。第3回京都市美術展に《春光》を出品。第2回新文展に《群鯉》を無鑑査出品。
1939年(昭和14年)	48歳	第3回新文展に《威振》を無鑑査出品。
1940年(昭和15年)	49歳	紀元2600年記念現代日本画展に《瑞鳥》を委嘱出品。東西作家日本画新作展に《水蜜桃》を出品。紀元2600年奉祝美術展に《爛漫》を無鑑査出品。
1941年(昭和16年)	50歳	第6回京都市美術展に《内海の春》を出品。
1942年(昭和17年)	51歳	軍用機献納作品展に《雄鶏》を出品。第5回新文展に《風薫る庭》を無鑑査出品。
1943年(昭和18年)	52歳	第6回新文展に《菊》を無鑑査出品。
1944年(昭和19年)	53歳	奉祝京都市美術展に《菖蒲》を招待出品。文部省戦時特別美術展に《大戦果に国華薫る》を出品。郷里へ疎開する。
1950年(昭和25年)	59歳	第1回関西総合美術展に《水禽園》を出品。
1951年(昭和26年)	60歳	1月、父重吉没。12月、母ユキ没。第2回関西総合美術展に《風景》を出品。

1954年(昭和29年)	63歳	3月、妻サクヨ没。第4回関西総合美術展に《石庭の雪》を出品(入賞)。第10回日展に《冠鶴》を出品。
1955年(昭和30年)	64歳	第5回関西総合美術展に《尾長鴨》を出品(入賞)。第11回日展に《水槽の魚》を出品。
1956年(昭和31年)	65歳	第6回関西総合美術展に《鵜》を出品。
1957年(昭和32年)	66歳	第7回関西総合美術展に《残雪》を出品。第13回日展に《魚槽》を出品。
1958年(昭和33年)	67歳	第8回関西総合美術展に《秋景》を出品(入賞上)。
1959年(昭和34年)	68歳	第9回関西展に《山》を無鑑査出品。
1960年(昭和35年)	69歳	第10回関西展に《彩秋》を無鑑査出品。
1962年(昭和37年)	71歳	第11回関西展に《芍薬園》を無鑑査出品。十和田湖、奥入瀬、盛岡等を旅行。
1963年(昭和38年)	72歳	第12回関西展に《水蓮》を無鑑査出品。
1964年(昭和39年)	73歳	大阪で個展(阪急百貨店美術部)を開催。山紫会展に《熱帯魚》を出品。
1965年(昭和40年)	74歳	平安桜楓会展(第17回)に《松琴亭》《御池庭》を出品。第14回関西展に《蘭花》を無鑑査出品。山紫会展に《鯉》を出品。第8回新日展に《光堂開扉》を出品。
1966年(昭和41年)	75歳	山紫会展に出品。平安桜楓会展(第20回)に《隣雲亭を望む》《修学院離宮林泉》を出品。
1967年(昭和42年)	76歳	第2回京都日本画総合展に出品。天橋立を旅行。山紫会展に出品。
1968年(昭和43年)	77歳	第3回京都日本画総合展に《仏像》を出品。山紫会展に《牽牛花》を出品。
1969年(昭和44年)	78歳	第4回京都日本画総合展に出品。山紫会展に《花》を出品。
1970年(昭和45年)	79歳	第5回京都日本画総合展に《不動明王》を出品。山紫会展に出品。
1971年(昭和46年)	80歳	山紫会展に出品。
1972年(昭和47年)	81歳	京都府向日市鶏冠井町に転居。山紫会展に出品。10月、交通事故に遭う。
1973年(昭和48年)	82歳	京の百景展に《柿干し風景》を委嘱出品。富士五湖・箱根を旅行。
1974年(昭和49年)	83歳	大阪で画業60年記念展(阪急百貨店美術部)を開催。
1975年(昭和50年)	84歳	日本画代表作家200人展に出品。
1976年(昭和51年)	85歳	京都で回顧展(京都府立文化芸術会館)を開催。
1980年(昭和55年)	89歳	福山で米寿展(天満屋百貨店)を開催。
1981年(昭和56年)	90歳	手元に残していた大作を、福山市・広島県立美術館・尾道市立美術館へ寄贈。
1982年(昭和57年)	91歳	紺綬褒章受章。
1983年(昭和58年)		6月28日、京都府向日市鶏冠井町の自宅で逝去(享年91歳)。遺族は遺作・資料を福山市・広島県立美術館・笠岡市立竹喬美術館・京都府立総合資料館・大阪市立美術館へ寄贈。
1984年(昭和59年)		大村廣陽名作展(福山城博物館)が開催され、約14000人が観覧。

竹杖会と京都画壇の先輩たち

〈参考図版〉

系譜 ※本文に登場した画家を中心に抜粋



B. 榊原紫峰《奈良の森》京都市美術館蔵 ©Ayako Sakakibara 2014/JAA1400195



A. 竹内栖鳳《兼風遊鹿図》海の見える杜美術館蔵



C. 竹内栖鳳《竹に狗子図》(部分) 個人蔵



D. 円山応挙《狗子図》(部分) 滋賀県立琵琶湖文化館蔵



E. 長沢芦雪《薔薇蝶狗子図》(部分) 愛知県美術館(木村定三コレクション)蔵



G. 橋本閑雪《百日紅鸚哥図》個人蔵

第2室 大村廣陽 生きものへのまなざし

☆は福山城博物館所蔵、*は寄託作品

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横 (cm)	
1	大村廣陽	(1891-1983)	鷲写生	1908 頃	紙本墨画着色	33.0 × 49.0	
2	大村廣陽		鮒写生	1908	紙本墨画着色	42.0 × 53.0	
3	大村廣陽		鳩写生	1911 頃	紙本墨画着色	42.0 × 53.0	
4	大村廣陽		鷹写生	1911 頃	紙本墨画着色	54.0 × 41.0	
5	大村廣陽		夏休暇日記	1908	紙本, 墨	23.5 × 16.2	
6	大村廣陽		写生帳	1911	紙本墨画着色, 鉛筆	19.5 × 30.0	
7	大村廣陽		写生帳	1911	紙本墨画着色, 鉛筆	25.5 × 34.0	
8	大村廣陽		休み (習作)	1911	絹本着色	154.5 × 288.4	
9	大村廣陽		狗子と鶏頭		絹本着色	147.5 × 50.5	
10	大村廣陽		威振		紙本着色	60.6 × 50.0	
11	大村廣陽		赤インコに青鷲		絹本着色	145.0 × 49.6	
12	大村廣陽		朝顔図	1934 頃	絹本着色	115.0 × 37.0	☆
13	大村廣陽		芥子図	1930-40 年代	紙本着色	148.5 × 85.0	
14	大村廣陽		雪中鴛鴦	1931	絹本着色	92.8 × 91.0	
15	大村廣陽		古都神鹿	1923	絹本着色	255.0 × 188.0	*
16	大村廣陽		鹿スケッチ		紙本, ペン, 淡彩	27.0 × 39.0	
17	大村廣陽		鹿スケッチ		紙本, ペン	35.0 × 24.0	
18	大村廣陽		群鹿図		紙本着色	67.0 × 93.7	
19	大村廣陽		古都神鹿 画稿		紙本着色	53.7 × 58.0	
20	大村廣陽		古都神鹿 小下絵		絹本着色	30.0 × 24.0	
21	大村廣陽		古都神鹿 鹿頭部習作		紙本着色	58.0 × 54.0	
22	大村廣陽		古都神鹿 鹿頭部習作		紙本着色	29.0 × 32.0	
23	大村廣陽		南国の水辺	1936	絹本着色	155.5 × 369.8	
24	大村廣陽		水牛スケッチ		紙本着色	54.0 × 46.0	
25	大村廣陽		南国の水辺 画稿		紙本, 鉛筆, パステル	28.0 × 42.0	
26	大村廣陽		南国の水辺 水牛頭部習作		紙本着色	77.0 × 68.0	
27	大村廣陽		南国の水辺 水牛頭部習作		紙本着色	39.0 × 77.0	
28	大村廣陽		軍鶏	1927	絹本着色	221.0 × 188.5	
29	大村廣陽		軍鶏 小下絵		紙本着色	42.0 × 42.0	
30	大村廣陽		軍鶏 習作		紙本着色	98.0 × 53.5	
31	大村廣陽		蓮池	1953 頃	絹本着色	216.5 × 165.5	
32	大村廣陽		秋景	1958	紙本着色	106.0 × 109.0	
33	大村廣陽		鶉	1956	綿本着色	104.0 × 110.0	
34	大村廣陽		光堂開扉	1965	紙本着色	215.2 × 157.5	
35	大村廣陽		魚槽	1957	紙本着色	172.5 × 111.6	
36	大村廣陽		コリー犬	1976 頃	紙本着色	58.4 × 76.3	



F. 竹内栖鳳《雄飛報国の秋》
日本芸術院蔵



H. 土田麦僊《朝顔》
京都市美術館蔵



I. 土田麦僊《罌粟》宮内庁三の丸尚蔵館蔵



J. 徳岡神泉《罌粟》
京都国立近代美術館蔵



K. 金島桂華《鴛鴦》
華鶴大塚美術館蔵

第1室 日本の近代美術

*は寄託作品

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
37	高橋秀	(1930-)	ブルーボール# 101	1971	油彩, カンヴァス	142.0 × 190.0
38	齋嘸	(1931-)	Violin on the chair	1967	油彩, 木	75.0 × 45.0 × 50.0
39	山口長男	(1902-1983)	壺形	1959	油彩, カンヴァス	183.0 × 274.0
40	岸田劉生	(1891-1929)	橋	1909	油彩, カンヴァス	33.6 × 45.7
41	岸田劉生		静物(赤き林檎二個とピンと茶碗と湯呑)	1917	油彩, カンヴァス	33.7 × 45.8
42	岸田劉生		新富座幕合之写生	1923	油彩, カンヴァス	31.9 × 41.0
43	岸田劉生		麗子十六歳之像	1929	油彩, カンヴァス	47.2 × 24.8
44	吉田卓	(1897-1930)	りんご		油彩, カンヴァス	38.0 × 46.0
45	児島虎次郎	(1881-1929)	ベルギー、ガン市郊外	1909-12 頃	油彩, カンヴァス	64.5 × 80.5
46	梅原龍三郎	(1888-1986)	仙酔島の朝		油彩, カンヴァス	65.5 × 80.5
47	白瀧幾之助	(1873-1960)	帽子の婦人	1905-10 頃	油彩, カンヴァス	72.3 × 53.0
48	林武	(1896-1975)	妻の像	1927	油彩, カンヴァス	90.9 × 72.7
49	小磯良平	(1903-1988)	西洋人形	1970-75 頃	油彩, カンヴァス	71.5 × 59.5
50	熊谷守一	(1880-1977)	女の顔	1931	油彩, 板	41.0 × 32.0
51	藤井松林	(1824-1894)	百花百鳥之図	1889	絹本着色	121.2 × 54.0
52	竹内栖鳳	(1864-1942)	風雪三顧図	1888	絹本着色	115.0 × 51.0
53	橋本関雪	(1883-1945)	暖翠		絹本着色	42.0 × 57.0
54	金島桂華	(1892-1974)	椿		紙本着色	118.0 × 31.5
55	片山牧羊	(1900-1937)	漁村春懶	1929	絹本着色	242.5 × 173.2
56	高松次郎	(1936-1998)	形 (No.1201)	1987	油彩, カンヴァス	218.0 × 182.0
57	松本陽子	(1936-)	荒野での試み	2010	油彩, パステル, 木炭, カンヴァス	194.0 × 259.0
58	野田弘志	(1936-)	ガラスと骨Ⅱ	1990	油彩, アクリル下地, カンヴァス	146.0 × 112.0
59	中川直人	(1944-)	アフリカの女王	1982	アクリル, カンヴァス	150.0 × 178.0
60	堀内正和	(1911-2001)	線C	1954	鉄, セメント	45.0 × 78.0 × 46.0
61	土谷武	(1926-2004)	植物空間Ⅵ	1990	鉄	64.0 × 57.5 × 41.5
62	平櫛田中	(1872-1979)	寿星	1962	木, 彩色	47.0 × 41.0 × 28.0
63	北大路魯山人	(1883-1959)	金銀彩武蔵野鉢	1925-34	陶	15.2 × 27.5 × 27.5
64	金重陶陽	(1896-1967)	一重切花入	1964	陶	20.0 × 13.0 × 11.0

第3室 ヨーロッパ美術

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
65	ギュスターヴ・クールベ	(1819-1877)	波	1869	油彩, カンヴァス	34.5 × 51.8
66	ジュゼッペ・パリッツィ	(1812-1888)	羊飼いと羊の群れの風景	1870 頃	油彩, カンヴァス	49.0 × 72.0
67	ジョヴァンニ・セガンティーニ	(1858-1899)	婦人像	1883-84	油彩, カンヴァス	120.0 × 87.0
68	ジャコモ・バッタ	(1871-1958)	輪を持つ女の子	1915	油彩, カンヴァス	51.0 × 60.5
69	アルベール・マルケ	(1875-1947)	停泊船、曇り空	1922	油彩, カンヴァス	38.4 × 46.0
70	ウンベルト・ボッチォーニ	(1882-1916)	カフェの男の習作	1914	油彩, カンヴァス	58.0 × 46.0
71	モーリス・ユトリロ	(1883-1955)	酪農場	1916	油彩, 板	51.0 × 65.0
72	ウジェーヌ・カリエール	(1849-1906)	腕組みの座る女		油彩, カンヴァス	46.0 × 38.0
73	パブロ・ピカソ	(1881-1973)	近衛騎兵 (17,18 世紀の近衛騎兵)	1968	油彩, パネル	81.0 × 60.0
74	パブロ・ピカソ		りんごとグラス、タバコの包み	1924	油彩, カンヴァス	16.0 × 22.0
75	クルト・シュヴィッターズ	(1887-1948)	抽象 19 (ヴェールを脱ぐ)	1918	油彩, 厚紙	69.5 × 49.8
76	ハンス・リヒター	(1888-1976)	ベルナスコーニ氏像	1917	油彩, カンヴァス	60.0 × 47.0
77	ジョルジョ・デ・キリコ	(1888-1978)	広場での二人の哲学者の遭遇	1972	油彩, カンヴァス	80.0 × 60.0
78	ピエロ・マンゾーニ	(1888-1978)	アクローム	1961	小石, カンヴァス	70.0 × 50.0
79	ジュゼッペ・カボグロッシ	(1900-1972)	Sup.671	1958	グワッシュ, 紙	71.0 × 50.0
80	ルチオ・フォンタナ	(1899-1968)	空間概念-銀のヴェネツィア	1961	油彩, ガラス, カンヴァス	60.0 × 50.0
81	サンドロ・キア	(1946-)	少女	1981	油彩, パステル, 紙, カンヴァス	194.0 × 150.0
82	メダルド・ロッシ	(1858-1928)	門番の女性	1883	ワックス, 石膏	37.0 × 30.0 × 17.0
83	ペリクレ・ファッツィーニ	(1913-1987)	風 (踊り子)	1956-60	ブロンズ	139.0 × 80.0 × 90.0

和室 松本コレクション「吉祥」

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
84	宙宝宗宇	(1760-1838)	萬歳緑毛亀	江戸時代	紙本墨書	96.5 × 28.6
85	作者不詳		色絵備前布袋香合	江戸時代	陶	(高) 2.5 (口径) 5.9
86	作者不詳		高取茶入 銘 宝珠	江戸時代	陶	(高) 5.6 (口径) 3.3 (胴径) 5.7
87	樂左入 (樂家 6代)	(1683-1739)	黒樂福寿文字入茶碗	江戸時代	陶	(高) 7.4 (口径) 10.4 (高台径) 4.5 ~ 4.7
88	樂旦入 (樂家 10代)	(1795-1854)	赤樂茶碗 不二の絵	江戸時代	陶	(高) 8.7 (口径) 12.0 (高台径) 5.4

1914 (大正3)年第8回文展出品の《せんたくもの》では、2頭の子牛が籠に置かれた洗濯物を口で引っ張りながらじゃれている様子を描き、翌年の第9回文展出品《初夏》では藤の花を前景に4頭の鹿を配した絢爛な画面を作り、立て続けに入選を果たしている。この《初夏》を描くにあたっては、鹿をスケッチしに奈良へ足しげく通っていたという。季節によって毛の模様が変わる鹿を通して、多様な表情を見せる動物の生態により興味を深めるようになったといい、以降、鹿というモチーフは1923 (大正12)年の《古都神鹿》(no.15)、1926 (大正15)年第7回帝展入選の《藤の花かげ》など廣陽の動物画作品にしばしば登場している。

若き日の廣陽は竹杖会において、師や先輩画家たちの作品や制作姿勢を間近で見て、大いに学び刺激を受けたことが想像されるが、ここで、廣陽の作品に見受けられる他の画家からの影響関係を、本展で展示されているものを例に見ていきたいと思う。

《古都神鹿》における、入念な観察と写生に基づく鹿の实在感や柔らかな毛描きの表現は、栖鳳による鹿図《薰風遊鹿図》(1899 (明治32)年、海の見える杜美術館蔵) (参考図版A)のそれに学んでいるところがあり、ひいては栖鳳より遡る京都日本画の源流、江戸中期の絵師円山応挙に始まる円山四条派の写生の精神を着実に汲んでいるものともいえる。また、群れる複数の鹿が生い茂る草木の下に座している構図については、榊原紫峰の《奈良の森》(1920 (大正9)年、京都市美術館蔵) (参考図版B)を念頭に置いていることが明らかである。(ただし、紫峰は絵専出身であるが竹杖会ではない。)もう一つ、栖鳳および円山四条派の潮流を強く感じ取れるのが、《狗子と鶉頭》(no.9)で、じゃれあう子犬は栖鳳《竹に狗子図》(1897 (明治30)年頃、個人蔵) (参考図版C)や遡れば円山応挙《狗子図》(18世紀後半、滋賀県立琵琶湖文化館蔵) (参考図版D)、応挙の弟子長沢芦雪《薔薇蝶狗子図》(18世紀後半、愛知県美術館 [木村定三コレクション] 蔵) (参考図版E)にも登場する、円山四条派の典型的なモチーフである。制作時期はおそらく先に挙げたものに比べ幾分下るかと思われるが、今にも飛び立たんとする猛々しい鷹の姿を描いた《威振》(no.10)については、背景こそ異なるものの全く同じ格好の鷹を描いた栖鳳の《雄飛報国の秋》(1938 (昭和13)年、日本芸術院蔵) (参考図版F)が存在しており、これは影響関係というよりは師の模作そのものである。《赤インコに青鳶》(no.11)は、1903 (明治36)年に竹杖会に入り、後に脱退した橋本閑雪による《百日紅鸚哥図》(1935 (昭和10)年頃、個人蔵) (参考図版G)を彷彿とさせる。この他、1920-30年代に描いた《中国美人図》にも、動物画と並んで中国の古事に材を取った絵を得意とした閑雪からの影響を感じ取れる。1934 (昭和9)年頃の《朝顔図》(no.12)は、竹杖会の先輩の中で、廣陽が最も私淑したという土田麦僊《朝顔》(1929 (昭和4)年、京都市美術館蔵) (参考図版H)からの感化が色濃く見られる。葉の部分に色を用いず墨の濃淡によって描くことで、白と青の花の色がより一層引き立つ効果が得られており、朝顔は麦僊が自ら栽培するほど愛好していたという花でもある。1930-40年代の《芥子図》(no.13)においても土田麦僊《罌粟》(1929 (昭和4)年、宮内庁三の丸尚蔵館蔵) (参考図版I)および同じく竹杖会の先輩徳岡神泉(ただし年齢は5歳下)による《罌粟》(1933 (昭和8)年、京都国立近代美術館蔵) (参考図版J)を参考にしている可能性が高く、白と赤・紫の花の色の配置や、葉の表裏がつくる緑色の階調が特徴的である。1931 (昭和6)年の《雪中鴛鴦》(no.14)は、つかいの鴛鴦という夫婦円満を意味する人気の吉祥モチーフを描いたもので、これは同郷・1歳年下で竹杖会へは先に入門していた金島桂華の《鴛鴦》(1927 (昭和2)年、華鶴大塚美術館蔵) (参考図版K)と近いものがある。背景に違いはあるが、画面中央で二羽が同じ方向に首を向けて寄り添い、下方には群青色に塗られた水辺、金泥が刷かれた装飾的な空間に共通性が見いだせる。

若き日の廣陽は、京都画壇の諸先輩の作品に感化され、様々な要素を吸収しながら精力的に画技を高めていった。この間、文展・帝展へも出品と入選を重ね、1929 (昭和4)年には小野竹喬・金島桂華と共に帝展無鑑査に推薦されるまでになっている。

制作過程に見る画家の姿勢

現在、ふくやま美術館には、大村廣陽の本画作品の他に、学生期から晩年に至るまでの、スケッチ、写生、画稿、下絵等、膨大な枚数の美術資料が保管されている。それらを1枚1枚改めていくと、画家がある作品を着想し、完成させるまでの制作過程を、つぶさに知ることができる場合がある。

例えば、《古都神鹿》の場合、鹿のスケッチ、それら様々な格好をとる鹿を画面上でどのように配置するか構想途中の図、背景となる藤の木のスケッチ、背景と鹿とを組み合わせて概ね作品の完成予想図となっている画稿、更には鹿の頭部のみを本画と原寸大で詳細に描き込んだ、本番前の部分的試作品とでもいえるような資料が確認されている。とりわけこの鹿の頭部が描かれた資料は、中央の雄鹿の表情を微妙に変えたものが何枚も存在しており、画家が自分の意図する作品の見せ場、鹿の表現にいかにか強いこだわりを持って制作していたかが窺える。1936 (昭和11)年制作の《南国の水辺》(no.23)についても、水牛のスケッチ、水牛の画面上での配置を何パターンも構想している図、



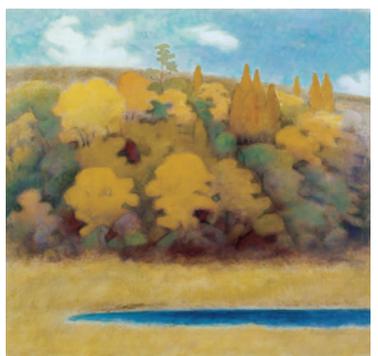
14.《雪中鴛鴦》



28.《軍鶏》



31.《蓮池》



32.《秋景》



34.《光堂開扉》



33.《鸕》



35.《魚槽》



36.《コリー犬》

水牛の頭部のみ描いた本画原寸大の試作品等の資料が確認されており、《古都神鹿》とほぼ同様の制作過程を経ていることが想像される。なお、両作品、および他の多くの作品において、現在のところ大下絵は確認されていない。大下絵とは、スケッチや画稿を経て最終決定した図像（小下絵）を、拡大して本画と同寸の画面に描いたもので、その描線は念紙（転写紙）等を用いて、あるいは透き写しをして本紙に転写されるため、本画の型紙といつてもよい存在である。制作過程で大下絵を作るか否かは、画家によって、作品によって異なる。ただ、絹本を用いた作品の場合、材質の特性上、紙本に比べて描き直しがしにくいいため、迷いなく描線が引けるよう大下絵を作っておく場合がほとんどである。《古都神鹿》も《南国の水辺》も絹本作品であるため、おそらく元々は大下絵が存在したと思われるが、現在は失われ、その大下絵から重要部分（鹿や水牛の頭部）のみ描線を写し取って彩色をほどこした試作品が館蔵資料に含まれていたものと推測される。

廣陽は、対象の観察とスケッチ・写生に始まり、納得のいく構図を求めて画稿を繰り返し、更に下絵と試作による入念なシミュレーションを経てようやく一つの完成作に至っていたようである。これら制作途中の資料群は、完成作の美しく整えられた画面を見ただけでは分かり得ない、画家が経た試行錯誤の跡を如実に伝えている。

戦後の変化

日本画は明治以降、常に西洋近代絵画の影響を受けてきたが、とりわけ戦後に入ってからその様式上の変化は顕著となる。伝統的な描線を主体とした‘描く絵’から彩色を主体とし絵具を厚く塗り重ねる‘塗る絵’が主流となっていき、画壇においても洋画の風潮を取り入れた日本画が戦後派として評価される傾向にあった。こうした流れを受けてか、画学生時代から一貫して徹底した写実描写を得意としていた廣陽の画風も、戦後数年間の空白を挟み、大きく変貌する。対象の輪郭線は色彩の中に埋没させ、油絵のように絵具を塗り重ねた絵肌の作品が次第に目立つようになる。またこの時期、日展への出品は断続的となり、関西総合美術展（のち関西展、現在の全関西美術展）や京都日本画総合展、グループ展である山紫会展へ活動の中心を移している。画題についても、それまで得意としていた花鳥画・動物画に加え、抽象的な趣の風景画や仏画へも関心を広めた。廣陽は1951（昭和26）年、60歳の時に相次いで両親を亡くし、その3年後には最愛の妻をも交通事故で失っているが、このことが仏画への傾倒という心境の変化を生じさせた大きな要因と言えるかもしれない。《光堂開扉》（1965（昭和40）年）（no.34）は廣陽の仏画作品の中では最も大作で、最後の日展出品作（第8回新日展）となったものである。中尊寺金色堂をはじめ各地の著名な仏堂を巡り取材した成果を、金泥を用いた荘厳で神秘的な画面に仕上げている。

このように、新たな画風の展開を見せる廣陽であったが、その根本となる制作姿勢——画学校以来身につけてきた徹底した観察と写生——は変わることがなかった。水槽の中に泳ぐ熱帯魚を描いた《魚槽》（1957（昭和32）年）（no.35）では、青年期の《古都神鹿》や《南国の水辺》と同様、本画に至るまでに描いたと見られる、熱帯魚のスケッチ・写生類が多数残されている。ある資料の端には「昭和三十二年 堺水族館（※大阪府堺市に1961年までであった水族館）にて写生」と取材地も記されており、老年に差し掛かってもおお変わらぬ生きものへの愛着と、画業において常に修練を怠らない廣陽の人柄が窺える。80代に入ってからは大阪・京都・福山にて回顧展を開くなど活動を見せたが、1983（昭和58）年、京都府向日市の自宅にて91年の生涯を閉じた。その後、廣陽の多くの作品、美術資料、画材、蔵書が遺族によって郷里・福山市に寄贈され、現在に至る。

日本画家・大村廣陽は、決して広く名の知れ渡った巨匠とはいえないかもしれない。しかし、その長きにわたる人生を通して地道に刻んできた足跡は、ここふくやま美術館においていつまでも残されることとなったのである。

（学芸員 安部すみれ）

【編集後記】 ふくやま美術館には、大村廣陽の日本画が62点あり、デッサンなどの美術資料が数千点あります。2008年には、「没後25年大村廣陽」展を開催し、アメリカにおける研究も踏まえながら、新しい廣陽の評価軸も紹介いたしました。今回の所蔵品展は、膨大な美術資料の中から、下絵などを選び抜いて、本画と下絵、デッサン、写生帳などを比較し、その創作の過程を詳細に見ていこうという展示です。なお、この所蔵品展は当館の若手学芸員のデビュー企画となるものです。同じ所蔵品ながら、若手らしい切り口で研究し、展示をしていくと新鮮な作品に見えてくるから不思議です。どうぞお楽しみください。

谷藤史彦（学芸課長）